

くまれま

霹靂

東雲八夫

血を吐いた。二度、三度。熱いのか、寒いのか。よくわからない。男は、それでも、鐘を打ち続けていた。

逃げろ。叫んでいた。城は燃えている。やぐらからは、よく見える。正門をおさえていた兵たちは、馬に、蹴散らされた。それも、見ていた。皆、死んだ。

城内に、敵が流れ込む。外壁を縫うように、馬が駆けていく。しんがりの兵が、迎え撃つだろう。

あの方は、きっと逃げきれぬ。男は、信じていた。

矢が、何本か飛んできた。背中に、刺さる。もう、痛みも、感じない。鐘の音は、やまない。空は、よどんでいる。男は、肩で息をしていた。白い。

逃げろ。

もう、矢は飛んでこない。胸の辺りは、赤く染まっていた。動くたびに、何かが、嘔き出す。辺りが、暗くなった。音だけが聞こえる。自分は、まだ、動いている。そう、思った。

おそらく、単騎で、駆けている。目に、浮かぶ。

髪飾りを、渡した。子に、届けて欲しいと、一言、告げた。

男は、つかの間、見つめてきたが、すぐに馬に飛び乗って、走り去った。それから、やぐらに登った。馬が、見えなくなるまで、見ていた。嘘を、ついてしまった。娘はもう、ずいぶん前に、死んだ。騙してしまった。

気が付くと、うづくまっていた。もう、駄目か。最後に、もう一度だけ、鐘を鳴らそう。そう、思った。

男は縄にしがみつこうようにして、立ち上がった。

勢いを付けて、体ごと、踏み込んだ。

生きる。

自分には、聞こえた。